Komazawa University

駒澤大學佛教學部論集第十九號　昭和六十三年十月

U・C・L・Aにおけるマールガ学会の報告

吉津宜英

一　参加の機縁

今年（一九八八年）六月二十五日から三十日まで一週間にわたってU・C・L・A（University of California, Los Angeles）で行われたマールガ（Mārga. 学会名については後に述べる）学会に参加したので、若干の報告をしたい。この学会に参加することになった機縁はやはり昭和六十（一九八五）年度の在外研究員として一年間アメリカに滞在したことによる。すでに論集第十七号に「アメリカ仏教学管見」として報告したが、その際、ロスアンジェルスに近いアナハイム市で行なわれたアメリカ宗教学会（A.A.R. 'American Academy of Religion）に参加した。もちろん、私がアメリカでの本拠地にしていたヴァージニア大（University of Virginia）宗教学部のポール・グローナー（Paul Groner）教授と一緒で、ポールはこの学会で日本天台宗の良源（九一二―八五）について発表を行った。ポールは私に多くの仏教学者を紹介してくれたが、その中の一人、ロバート・バズウェル（Robert E. Buswell Jr.）教授が今回私を招いてくれた人である。

さらに、もっと直接の機縁は、私が昨年（一九八七年）ソウルで開かれた元暁学会に出席し、そこでロバートと再会したことによる。この元暁学会についてはすでに中外日報紙上などで大々的に報じられているので、改めてその説明はしないが、ただ一人アメリカから招かれたのがロバートであった。(1) その学会の何日目かの懇親会の席上で「来年六月U・C・L・Aで、マールガ学会を開くので参加してくれませんか」という話しかけがあった。私は六月というと大学の授業の前期の途中だけれどもという唯だ一つのひっかかりを感じつつも、まあ何とか大学や学部の了解は取れるだろうと考えて、その場でOKしたのである。ただ私にはこれから約一年ぐらいかけてやるべき仕事があるので、特別なペーパーは用意でき

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

ないかと言うと、ロバートはディスカッサント（discussant）としてでも良い旨を語ってくれ、私はそれならばと応じたが、これはともかく自分自身の英語力を認識していない、いわば暴挙とも言うべきものであった。ロバートは私の英語力がどの程度かよく分かるのだから、ともかくペーパーの用意を要求しても当然なのである。結論的には、後に述べるように今の私にはピッタリの題目が用意され、とうてい不可能なディスカッサントの一人という席から発表者の方に移されて、ペーパーの用意なしに発表するという、このような形式の学会では許されまじき態度が許され、何とか参加した痕跡を残すことができたのは、ひとえにロバートの配慮によるものと私は心から感謝している。

二　ロバート・バズウェルの紹介

ここで、この学会の主催者であるロバート・バズウェル教授のことを少し紹介したい。しかし、彼に履歴書を書いてもらったわけでも、彼に個人的なことを伺ったわけでもなく、彼の著書及び彼が寄稿した本での著者紹介に拠るのであるから、きわめて簡略なものになることを、御本人にも、読者にも了解していただきたい。

彼は約十年間も韓国の松広寺で、僧侶となって坐禅修行をした。その間にも曹渓宗の開祖と称せられる普照大師知訥（一一五八―一二一〇）の研究を続け、のちにカリフォルニア大バークレー校大学院に復帰してから、次のような本を出版した。

"The Korean Approach to Zen: The Collected Works of Chinul" University of Hawaii Press, 1983

本書は現存する知訥の著作をすべて英訳し、注を付し、そして冒頭に知訥の生涯と思想とを論じた、四六八頁もの大著である。私もいずれは本書を読破して、知訥の思想に迫ってみたいと考えている。

さらにロバートはバークレー校でランカスター（Lewis Lancaster）教授の指導を受け、『金剛三昧経』の研究で博士号（Ph. D.）を修得し、現在はU・C・L・Aの東アジア言語・文化学部（Department of East Asian Languages and Cultures）の助教授（Assistant Professor）であるが、すぐに準教授（Associate Professor）に昇任するであろう。間も無く、彼の博士論文も公刊されるようであるし、また更に中国における偽経を中心にした編著も刊行されるようである。[2] [3]

さて、今回の学会での彼の発表は後にみるようにアビダルマ仏教に関するものであった。知訥の研究から出発し、主として禅の研究者として認めていた我々には一見不思議に感じられた。しかし、彼は今回の学会にも出席したバークレー校のアビダルマ仏教研究のジャイニ（Padmanabh S. Jaini）教授

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

の薫陶を受けているのであり、さらに広い視野から中国や韓国の仏教を把握する意図をも含んでいることを考えれば何の不思議さもなく、むしろ、これからの彼の幅広い活躍の一環として理解される。

今回の会議はだいぶ前から数人の学者で相談していたもののようであるが、結局はロバートが中心になって推進することになったとのことであった。側面からはアリゾナ大（University of Arizona）のジメロ（Robert Gimello）教授の協力をあおぎながら進めていったが、ロバートの夫人、京子さんの助力も大きかったと思われる。私自身も、U・C・L・A滞在中、京子さんには大変御世話になったことを記し、ロバート紹介のしめくくりとしたい。

三　会議の日程と進行

ここで一応会議の日程と進行について表にして示そう。止泊したのはU・C・L・Aのゲスト・ハウス（Guest House）であり、会議はファカルティ・クラブ（Faculty Club）という教授用の大学会館といった建物で行なわれたので、我々はこれら二つの建物の間を毎日往復したということになる。朝食と昼食はファカルティ・クラブの内で取り、夕食は大学町の内の中華料理店で全員で御馳走になった。

六月二十五日（土）　到着
午後七時―九時　ゲスト・ハウスでレセプションとオリエンテーション

六月二十六日（日）
午前八時　朝食
〃　九時　〃南・東南アジア仏教〃
発表者　グレイス・バーフォード
ジョージ・ボンド
アラン・スポンバーグ
午後十二時半　昼食（Buffet Lunch）
〃　二時　〃南・東南アジア仏教（続）〃
発表者　コレット・コックス
ロバート・バズウェル
P・S・ジャイニ
午後六時　夕食

六月二十七日（月）
午前八時　朝食
〃　九時　〃中国仏教〃
発表者　ダン・スティブンスン
吉津宜英
ピーター・グレゴリー
午後十二時半　昼食（Orang Beef）

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

〃　二時　〃中国仏教（続）〃
発表者　韓基斗
ジョン・マクレイ
ロバート・ジメロ
午後六時　夕食
六月二十八日（火）
午前八時　朝食
〃　九時　〃東北アジア仏教〃
発表者　カール・ポッター
ポール・グローナー
カール・ビールフェルト
午後十二時半　昼食（Pasta with chicken）
〃　二時　この日の午後はフリータイム。我々はゲッティ美術館に行き、その後でボーディ・トウリーという本屋に行き仏教書を買う。
午後七時　会議のメンバーの中、数人のものが前角博雄師主宰のロスアンジェルス禅センターに招待された。
六月二十九日（水）
午前八時　朝食
〃　九時　〃チベット仏教〃
発表者　ジェフリー・ホプキンス
アンナ・クライン
ドナルド・ロペツ
午後十二時半　昼食（Vietnamese Beef）
午後二時　ディスカッサントによる総まとめと討論
発表者　リー・イヤレー
ベルナール・フォール
午後六時　おわかれディナー
六月三十日（木）
午前八時　朝食、出発。

初めは出席を予定していた人が欠席したり、韓国の韓基斗先生のように帰国予定が早まったために発表予定をくり上げたり、カール・ポッター教授の発表は内容がアビダルマでありながら、日本仏教の人々と一緒に発表するというような若干の変更とちぐはぐはあったが、終始司会者をつとめたロバート・バズウェルの司令よろしきを得て、うまく進行したといえよう。

発表形式は、私を唯一の例外として全員の英文のペーパーがメンバーに配布されているのであるから、発表者は十五分間を限って、その要点を述べるだけである。そして、その発表についてディスカッサントを中心にして討論を行う。討論が活発かどうかで、その発表者の発表内容へのメンバーの評

NII-Electronic Library Service

価の度合いも知られるようである。

四　発表内容について

そして、次に前の進行に合わせた形で各発表者の発表題目を示し、その後でその内容のポイントのみを簡単に記してみよう。

June 26 (Sunday)

Grace Burford (Georgetown University). "Theravāda Buddhist Soteriology and the Paradox of Desire."

George Bond (Northwestern University). "The Role of Sīla in the Magga According to the Theravāda Buddhist Tradition"

Alan Sponberg (Stanford University). "Vision and Cultivation on the Path to Liberation in Early Buddhism."

Collett Cox (University of Washington). "Attainment Through Abandonment: the Sarvāstivādin Path of Removing Defilements."

Robert Buswell (University of California, Los Angeles). "The Wholesome Roots and Their Eradication: A Descent to the Bedrock of Buddhist Soteriology."

Padmanabh S. Jaini (University of California, Berkeley). "On the Ignorance of the Arhat."

June 27 (Monday)

Dan Stevenson (Butler University). "The Pathless Path: Practical Considerations Behind Chih-i's Systematization of the Six Identities."

Yoshihide Yoshizu (Komazawa University, Japan). "The Mārga in Early Hua-yen Buddhism."

Peter Gregory (University of Illinois). "The Cosmogonic Basis of Tsung-mi's Theory of the Path."

Ki Doo Han (Wŏn'gwang University, Korea). "On the Sudden Awakening of the Ch'an School in the Dharma Teaching of the Mind Ground" (Simji Pŏbmun e nat'anan Sŏn'ga ŭi tono sasang).

John McRae (Cornell University) "Bracketing the Emergence of Encounter Dialogue: the Transformation of the Spiritual Path in Ch'an Buddhism"

Komazawa University
NII-Electronic Library Service

Komazawa University

Robert Gimello (University of Arizona) "Wen-Tzu Ch'an: Learning, Letters, and Meditation in Northern Sung Ch'an"

June 28 (Tuesday)

Karl Potter (University of Washington) "Abhidharma Philosophy in the Early Years"

Paul Groner (University of Virginia). "The Realization of Buddhahood with This Very Body (Sokushin Jōbutsu): Tendai Interpretations after Saichō (767–822)."

Carl Bielefeldt (Stanford University). "No-mind and Sudden Awakening: Thoughts on the Soteriology of a Kamakura Zen Text."

June 29 (Wednesday)

Jeffrey Hopkins (University of Virginia). "A Tibetan Perspective on the Nature of Spiritual Experience."

Donald Lopez (Middlebury College). "Paths Terminable and Interminable: Does Saṃsāra Ever End?"

Anne Klein (Stanford University / Rice University). "Beyond Cultural Construction? Concentration and Indo-Tibetan Claims for Unmediated Cognition: The First and Sixth Bodhisattva Grounds."

以下、各発表者の発表の内容を紹介したいのであるが、正直にいって全部のペーパーを読了していないし、専門外という」ともあるので紹介の仕方にかなりの濃淡の出ることを御理解いただきたい。また、この会議中、私の語学力の不足を補う助力をしてくれたポール・グローナーの意見もかなり加味されていることを申し添えておく。

ここで、改めて、この会議の名称についても考えておかなくてはならない。

"Buddhist Soteriology: The Mārga and Other Approaches to Liberation."

これが正式な名称であるが、Seteriology とは辞書によるとキリスト教神学の用語で、キリストによる救済の教理を説く救済論を言うようである。神を信奉しない宗教である仏教にふさわしい用語ではない。Buddhist Soteriology を仏教救済論と訳しても意味不明であろう。そこで、その二語でもって解脱論ぐらいに了解するほかはない。そして、コロン以下の「マールガと解脱への種々なる方法」という一種の副題は、まさに解脱論あるいは解脱道がこの学会の共通テーマで

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

あることを明示している。更に、この一文中の「マールガ」（道）を以て学会のニックネームとし、Mārga Conferenceと呼ぶのである。このような共通テーマの下にインドから日本にわたる仏教の各種形態の中に、いかに解脱道が説かれているかを検討しあうのが、この学会の目的なのである。ただ、このような形で、マールガという言葉を仏教全体の解脱論にまで広げて使用することについての疑問は後に私の発表の項で再び考えることにしたい。

さて、それではバーフォード教授の論文から順次一わたり見てゆこう。本論文は仏陀の教説としては最も古いといわれているスッタニパータ所収のアッタカ・ヴァッガを分析したものである。彼女によるとアッタカ・ヴァッガには一方では無欲で、どんな特定の見解（diṭṭhi）にも執着してはいけないと説かれながらも、他方では解脱への意欲と正しい見解の保持とが強調され、これらの二つの方向は一見両立しえないように思えるという。次に彼女はアッタカ・ヴァッガの注釈書であるマハーニッデーサと仏音のパラマッタ・ジョーティカーの該当個所を検討し、原意よりも教団の要請に即した形で仏陀とその教えが正しい見解の内容であり、それ以外の思想に心を奪われるべきではないといった方向で解釈されていることを示す。

次にボンド教授の発表はテーラヴァーダ仏教における戒の役割を論じたものである。彼は上座部における戒の原意から説きおこし、十戒、五戒、十学処、さらに小戒・中戒・大戒など種々の戒相を示す。そして上座部では戒は決して予備的なものではなく、目的である解脱と一体化したところで把握されていると指摘する。最後の部分で、最近、上座部仏教の内にも革新運動が起こり、彼らは本来在家が守るべき十学処を捨てて、出家用の十戒を守り、しかも在家ですら、この世で解脱できるはずだと主張していることを紹介し、このように戒をめぐって革新運動が起こるところに上座部仏教の特色が存在すると述べている。

次にスポンバーグ教授に移ろう。彼は本来唯識の教学に詳しいが、今回は見道と修道という修行のあり方をめぐって、アビダルマから原始仏教にまでさかのぼり、さらに印度思想全体にまで言及する。神秘的（mystical）ともいわれる見道と、理性的（rational）とも称される修道とがアーガマの中でどのように示されているかを検討し、さらに特に説一切有部のアビダルマの中で結合されるに至った経緯をフラウワルナー（Erich Frauwallner）教授の説を批判しながら論ずる。

次にコックス教授であるが、彼女は京都に三年ぐらい滞在し、大谷大学の桜部建教授や龍谷大学の加藤宏道講師の指導を受けたということで、日本の関係論文も多く引用した。先ずアビダルマ仏教の目的を明らかにし、その目的に至るには

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

煩悩の断尽が不可欠であることから、アビダルマ（特に説一切有部）の煩悩論を詳論し、さらに断尽の様相に説き及ぶ。

次にバズウェル教授は断善根について論究した。その前提として、善根とは何かということが明らかにされ、説一切有部以外の学派の断善根と有部の断善根を分けて論究し、さらに断根善と一闡提（icchantika）との関係に説き及んだ。一旦断善根になったとしても、続善根を実現すれば、それは阿羅漢よりもすぐれているということが指摘され、親鸞の悪人正機説を想起する。また結論的には、布施（dāna）の意義を強調したが、きわめて教理的研究の中から、いともすなおにこのように言われてみると、現代的な「いかに仏教はあるべきか」という視点からも深く考えさせられた。

つづいてジャイニ教授に移ろう。彼は倶舎論冒頭の帰敬偈を取り上げ、仏陀の一切智者性と、アラカンの無知性とを論ずる。したがって、本発表もいわば煩悩論の範疇に属するが、自らジャイナ教徒でもある彼はジャイナ教の教理を引用し、仏教と対比させた。今回の学会は、のちのポッター教授を含めて、アビダルマの研究が多いわけであるが、ジャイニ教授の存在と彼の指摘は他の部会に無い良い意味での緊張感をアビダルマ部会に与えていた。

さて、第二日目はプログラム変更でこの日の発表となった韓国の韓基斗教授の発表をも含めて、中国仏教部会と称してもよいであろう。トップバッターはスティブンスン教授である。彼は天台智顗の説く六即の意図を追究した。その前提として天台の行位としての五十二位の階位の成立を智顗の師である南岳慧思の著作にまでさかのぼって検討する。その上で六即を論ずるが、彼は次第（漸）であると共に円融（頓）であるような六即のような修道論の形成は『摩訶止観』巻二下の「淮河の北に大乗空を行ずる人有り」といわれたり、同じく巻五上に「闇証の禅師、誦文の法師の能く知る所に非ず」といわれるような一群の仏教者を批判的に意識して成しとげられたものではないかと問題提起する。

次は私の発表の番であるが、後に節を改めて論ずるので、グレゴリー教授に飛ぶことにする。実は私の発表はかなり彼を意識し、いわば彼の前座の役目を果したつもりである。彼の宗密研究はかなり長年に及び、それだけに深まっている。今回は、『禅源諸詮集都序』の中にある鎌田茂雄先生が名づけたところの「悟りと迷いの図」[4]を徹底的に分析した。彼は題目に Cosmogonic という難しい言葉を用いた。辞書によると Cosmogony とは「宇宙生成論」とかとあるが、もう一つ似たような言葉で Cosmology「宇宙論」というのがあって、アメリカ人もよく区別できないらしい。彼の発表の後では肝心な彼の内容の検討よりも、これらの二語をめぐる定義の仕合に終ったのは残念であったが、彼がもっと平易な題

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

名にしておけば良かったのかもしれない。ただ、ひょっとしたら、この宗密の発想を後の周敦頤の『太極図説』あたりと関連づける意味で、あえてこの題にしたのかもしれない。

彼は冒頭で智儼と法蔵と宗密の三者の教判について比較し、智儼は hermeneutical（解釈学的）、法蔵は sectarian（宗派的）そして宗密は soteriological（解脱論的）と特色を述べた。これに対して、私は法蔵への規定にはともかく同意するが、智儼をそのように規定することについては保留したいと述べた。だいたい、解釈学という言葉が、私にはソテリオロジーと同じ程度にむつかしい。

さて、悟りと迷いの分析についていえば、彼の編著である『頓と漸』所収の彼の論文[5]もすでに読んでおいたので、よく理解することができた。特に私がぼやっとした理解しか持っていなかった解悟（The enlightenment of initial insight）と証悟（The enlightenment of complete realization）との区別については明確に教えてもらった。すなわち宗密のいわゆる頓悟漸修の頓悟は解悟に始まって証悟に極まるのである。そして、漸修によってのみそれが可能となる。

これらの分析は単に『禅源諸詮集都序』のみによるのではなく、『円覚経大疏』や『原人論』とも一致することが確認され、さらに北宗禅や洪州宗への宗密の批判に際しては『裴休拾遺問』（中華伝心地禅門師資承襲図）も援用される。このグレゴリー教授の研究によって宗密教学の綱格はほぼ明らかにされたといってよいであろう。ただ、問題になる点はいくつか存在する。まず、宗密教学の全貌の解明ということになれば、やはり『円覚経道場修証儀』のような宗密の実践面の研究は無視できないだろうということである。次に宗密が正統と考える荷沢宗の教えと神会自身の思想とを対峙させて、同異を検討してみる必要はあるだろう。また私は『華厳禅の思想史的研究』の中で宗密を批判したわけであるが、私の研究を良く理解してくれているグレゴリー教授がこの批判の面についてどのように考えているのか伺いたいものである。いずれ宗密についての大著が公刊されると聞き及んでいるが、宗密という人物が仏教史を越えて、中国の宗教思想史の上からも大きな存在であるだけに、今私の指摘した二、三の点も考慮して、この際徹底的に総合的な研究を期待したい。以上、グレゴリー教授の所が大変に長くなったが、学会の場で発言しようと考えていたことを、全く証文の出し遅れではあるが、ここに記しておく。

さて、二十七日午後の部会の第一発表者は韓国の円光大学の韓基斗教授であった。彼は達摩の心地法門と呼ばれるものを頓悟の内容と規定し、それが南宗禅の中でいかに伝持されたかを示そうとした。宗密の頓悟漸修に対して、頓悟頓修こそが心地法門を言い表わすにはふさわしいと彼は最後に述べ

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

ている。

次にマクレイ教授に眼を転じよう。彼は一昨年大著[6]を公刊して、初期禅（Early Ch'an）の研究に一くぎりつけたようで、これらは『六祖壇経』の研究と洪州禅（馬祖あたりから始まる禅宗の動きを Classical Ch'an と称し、先程の Early Ch'an と区別する）の解明に向うようである。今回の発表はその Classical Ch'an の本質に機縁問答（encounter dialogue）を見ようとするものである。資料としては主として『祖堂集』を用い、『宝林伝』にも言及した。伝統仏教の修行は往往にして個人のレベルで行い、目的を成就しようとするが、禅宗では一対一の師弟の問答こそが修行になるのだという指摘である。修行に相手が必要であるという観点では、この指摘は先にみたバズウェル教授のダーナ（布施）の重視と通うところがある。私の「宗」の提示が禅宗の本質であるという立場からすれば個の宗旨と個の宗旨が出会い、そして問答によって自覚を深めてゆくということは当然であろうと思う。ただ問答が語録化して、文字が間に介在するようになると困難な事態も生じたことであろう。中国禅の真の成果と問題点を明らかにしてもらいたいと期待している。

次にジメロ教授に移ろう。彼はまず仏教一般に共通の一つのパラドックスを語る。すなわち、仏陀は一切は無常だと説いたが、その無常性を悟るために絶えざる修行が要請され、ある学派では法は永遠だとも説くに至るのである。大乗仏教でも同様であって、一切皆空と言いつつも、利他行とか仏陀の無量の功徳は有として認められる。次に具体的に中国の禅宗の歴史の上でも同様のことが伺われるというのが今回の発表の後半部分である。つまり、不立文字を主張し、無一物を説く禅宗の中で、いかにして宋代に慧洪（一〇七一―一一二八）の『石門文字禅』に代表されるような文字を大切にし、文化を重んずる禅が出現したかということである。このようないわば文化禅のところで禅宗は儒学の人々とタイアップできる場があるのであるが、その思想的なベースになっているのはやはり宗密に由来する禅と教の合一（私の呼称では華厳禅）にあるようである。ある夜のレセプションの席上で、彼は永井政之助教授の名前に言及した。論文を読んでいるようだ。永井氏の「庶民」の立場からの禅宗のとらえなおしといった視点に彼が注目するのであろうか。さらに、今回のペーパーでは石井修道教授の『宋代禅宗史の研究』にも注の中で言及していた。

第三日目は〝東北アジア仏教部会〟と銘打ってあり、それはどうでも韓国と日本の仏教とを含意するものであったらしいが、東国大学の李箕永教授は欠席であり、韓基斗教授はすでに第二日目で発表を終了し、帰国されたので、日本仏教はグローナー教授とビールフェルト教授の二名だけとなった。

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

その二人の前にポッター教授のアビダルマ研究の発表が急遽入ってきた。彼の発表は初期のアビダルマ思想の特に修道論を論究しようというものであったが、何か特定のテーマにしぼられていなかったので、やや散漫な印象を受けた。

さて、グローナー教授は今回最澄以降の日本天台宗の即身成仏義の変遷について詳細な報告をした。最澄自身の即身成仏義については最晩年の著作である『法華秀句』の中に「即身成仏化導勝」という一章があり、すでに彼はこれにもとずいて最澄の即身成仏義についての論文を書き、いずれ公刊される予定である。[7] いずれにしても最澄の弟子たちからして大いに即身成仏に関心を持っていたという。これは明らかに空海の『即身成仏義』をはじめとする密教、つまり真言宗への対抗意識によるだろう。天台家の人々ははじめは『法華経』自体の中で「提婆達多品」に出る竜女成仏をもって即身成仏の根拠にしていたが、次第に密教を取り入れ、いわゆる台密を形成することによって証明するようになった。その一つの高まりが『即身成仏義私記』を著わした安然（八四一―八八九？）であることが論究される。そして、そのような天台の密教化にプロテストし、天台本来の教理に復帰しようとした人として宝地房証真が位置づけられる。

さて、グローナー教授の研究も以前の良源についての発表や今回の発表を拝見すると、いよいよ本覚思想の問題をもからめて源信（九四二―一〇一七）の研究でまた大著を物される必要があるのではないかと思う。さらに、日本の真言宗の歴史的研究も必須の課題であろう。また、今回の発表に限らず、もうそろそろグローナー流の日本仏教史観なり、天台教義論なりが拝聴できてもよいのではないかという印象を持つが、いかがであろうか。

次にビールフェルト教授は円爾弁円（一二〇二―八〇）の『坐禅論』を英訳し、その内容を分析した。問題意識としては道元の坐禅論あるいは『弁道話』あたりの坐禅観と比較したいということが根底にある。今回は、特に無心（No-mind）という言葉に焦点をあて、その坐禅観の頓悟性を論究した。ジャイニ教授は彼の発表に対して、no-mind よりも、no-minding と訳した方がニュアンスが出るのではないかと提案した。思想書の翻訳のむつかしさを示す一つの事例である。

さて、学術会議の日程としては最後の第四日はチベット仏教部会であったが、実はロペツ教授もクライン教授もヴァージニア大でホプキンス教授の教えを受けた人たちで、したがって三人共にツォンカパを始祖とあおぐゲルク派の教学を中心とした発表であった。まずホプキンス教授はアティーシャ（九八二―一〇五四）の『菩提道灯論』に出る三類の機根を取り上げ、それら三類がいかに次第に高く位置づけられるかを

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

更にツォンカパやジャムヤンシェーパなどの文献を援用して説明した。さらにルドルフ・オットーやユングなどの文献と比較して宗教経験の本質に迫ろうとしている。

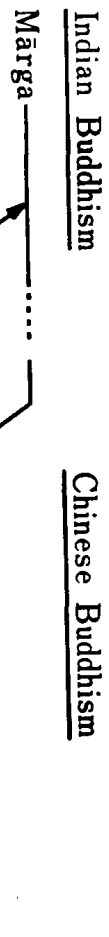
次にロペツ教授も資料的にはツォンカパやジャムヤンシェーパのものを用いると明言する。テーマは全体としては一乗と三乗の問題といえよう。まず煩悩論について声聞縁覚の二乗の断尽した煩悩と菩薩の煩悩への対処の仕方を検討し、次に一乗と三乗との論争を扱いつつ、アラカンは大乗に入れるかどうかを論ずる。

最後に、クライン教授は主としてチャンドラキールティの『入中論』と及びそれへのツォンカパたちの注釈を用いる。そして、彼女は空性を直接的に認識することを求めて、十地のうちで初地と第六地の分析を行う。

以上、まことに雑駁で、簡略ではあるが発表者十八人の発表内容のポイントのみを紹介した。その他、ディスカッサントとして参加したフォール（Bernard Faure, Stanford University）教授やイヤレー（Lee Yearley, Stanford University）教授もそれぞれの発表ごとに、また二十九日の午後のまとめの部会で、多くの発言をなしたが、私にはそれをまとめる力がないので残念ながら報告することはできない。

五　私の発表について

私に与えられた題は「初期華厳教学における修道論」とでも和訳されそうなので、ちょうど直前に参加した仏教思想学会での発表を転用させていただいて智儼（六〇二―六八）と法蔵（六四三―七一二）の一乗義の解釈の差異とその差異が修道の面でどのように表われるかについて語るつもりであった。そして実際に発表の後半はそのような内容となったのであるが、発表の前半部分は次の示すようなチャート（図）を提示して、インド仏教から中国仏教への大きな流れを考えてみた。



この図表は決してこの時の思いつきではなく、最近一乗について、いろいろ考えているうちにこのようなことも言えるかなあと私のゼミなどでは提示していたものである。それがこの学会でこの図を提示することになったのは、この学会の個々の発表内容が前節で紹介したようなものであったことにも起因するのである。すなわち、個々の発表内容はそれぞれに

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

詳細であり、すぐれたものであるが、どうも全体的な見通しというか、位置づけが不明確だという印象が第一にあり、しかもチベット仏教の発表はあるとはいえ、インド大乗の般若や法華だって立派に“soteriological”ではないかという疑問が第二にわきあがり、そして第三に“Mārga Conference”というけれどもこのマールガという言葉でインド、中国、チベット、韓国、日本などの仏教の諸形態すべてを包括してよいのだろうかという問題意識が生れ、このチャートの提示とあいなったわけである。

第三の問題意識からいえばmagga, mārgaはインド仏教一般に用いられるであろうし、中国では多く「道」と翻訳されているであろうし、また日本語でも「道」あるいは訓読で「みち」ともなろう。これらのmagga、mārga、道、みちは簡単に等号で結ぶことのできない、それぞれの言語の背景を担っている。たとえば同じ漢字でも中国の思想史の文脈で道というのと、日本の茶道とか武道とかいう道とではかなりの違いがある。日本語ではむしろ「みち」と訓む方が何かしら倫理的なニュアンスを感じるのである。

そこで、マールガ会議と一般化されているけれども、もう少しマールガにこだわって、マールガの意味を特定してみる必要があるのではないかと考えたのである。その結果、やはりマールガは四聖諦の道諦（mārgasatya）にみられるようにアーガマからアビダルマ仏教を代表する言葉と考えるべきではないかと思うのである。四諦の綱格を重視する仏教はマールガの仏教と呼んでよいのではないだろうか。

そのマールガ仏教に対して大乗仏教をヤーナ（yāna）運動として把えることが可能であろう。マールガ仏教にプロテストして出てきた運動なのでチャートでは↕という印を用いた。このヤーナ運動の形態は小品や大品の『般若経』の冒頭部分によく示されているが、後には『法華経』のように一乗あるいは一仏乗といった主張ともなる。このようにマールガとヤーナの対応としたからといって、従来のアビダルマと大乗との対応と同じではないかともいえるが、大乗というとすぐに小乗を連想し、批判という視点が出てくるので、一旦大乗の大を取り去ってヤーナの運動ということにしてみると、この運動の問題点がよりよく見えてくるのではないかとも考える。

実は中国仏教を見てゆく場合に、まずその前提として大乗は共通してヤーナの運動であったという確認が大切になってくる。先のチャートでいえばマールガの仏教もヤーナの運動も両方共に中国に入ってきたが、鳩摩羅什の活躍によって大乗がすぐれているという認識が一般化する。それならば大乗のみを仏説とし、小乗を非仏説として捨て去るのが印度仏教の流れからすれば当然であるが、大乗小乗ともに仏説という

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

ことになったところに中国仏教の出発点がある。先程、大乗をヤーナの運動という確認が必要であるといったのは、この中国仏教の出発点との対比からの発想である。すなわち、先にみたように印度ではマールガとヤーナとは対立関係にあったのに、中国仏教では優劣関係として把握され、一切が乗（ヤーナ）として呼ばれる。小であれ、大であれ、仏説としては平等に乗と称される。いわば中国仏教は印度の仏教を受け入れつつも、印度仏教の歴史を全く無視した、全く中国仏教独自の出発点から展開するのだということを言いたいのである。

中国仏教の流れの第二のポイントはこれら印度仏教の総括としての、また仏説として乗を教に組み替えることである。先のチャートの中で「乗—教」という部分がそれを示している。天台智顗の『法華玄義』における南三北七の批判と彼独自の教判の建立も、乗を教に組み替えてゆく壮大な試みであると思うが、実は法蔵の『華厳五教章』の「乗教開合第五」の一項も文字通り乗から教への証明を行っているのである。『五教章』の「建立乗第一」とはまさに一切の仏説を別教一乗と同教一乗の下へ包摂しようとする。「分教開宗第四」では自からの教判としての五教十宗を示す。その後すぐに「乗教開合第五」では特に五教と諸乗との対配を行い、「教起前後第六」以降は完全に五教が中心となり、一乗三乗小乗などは五教の体系を補うものにすぎなくなってゆくのである。

このように乗から教へという証明の事例を法蔵以外にももっと探す必要はあるが、一般に教判あるいは判教が中国仏教の特色の一つであるといわれるところに「教」として仏説を一括する姿勢があらわれているといえよう。では何故に教でなければならないのか。それは儒教を国教にしたこともある中国の思想風土からの仏教への要請といえよう。

この「教」としての仏教の確立に対してプロテストしたのが「宗」を重んずる禅宗であるということ、またそれに付随する問題点などは『華厳禅の思想史的研究』「第三章　達摩禅宗の成立と発達」ですでに説明したので、ここでは省略する。先のチャートでは乗—教↕宗として示した。

さらにチャートで教と宗とを結びつける形で「道」を示したのは、いうまでもなく宗密（七八〇—八四〇）から始まる一つの大きな流れである。私は仮に華厳禅と命名したが、一般には教禅一致説といわれているものである。これを道としたのは宗密が『原人論』で批判した韓愈（七六八—八二四）の『原道』と、宗密を批判して成立する朱熹（一一三〇—一二〇〇）などの道学と宗密とは、たしかに立場を異にするとはいえ、宗密が三教一致に通ずる立場を開く時、そこでは道を共にしうるということが認められるからである。宗密の用語としては性とか源とかいう立場であるが、まさにそのような言

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

葉はかえって道という語義内容を明らかにする。このような道が「マールガ」とも異り、「みち」とも違うことは言うまでもない。(8)

このようなことを、もっと簡単に述べて、次に智儼と法蔵との教学の違いをまたチャートにして示し、説明したのであるが、今はその部分は割愛したい。いずれ『仏教学』誌上にこの部分の詳論を載せるので、御批判いただきたい。私の発表の後半の部分については二、三の質問が出たが、前半の方についてはメンバーの誰からも何の質問も出ず、通訳してくれたポール・グローナーも不思議がっていた。ポールは殊の外、前半部分を推奨してくれ、ペーパーを用意しなかった私にも論文としての成果への路を開いてくれたことはありがたいことである。

六　まとめ

先に発表した十八人の内容のポイントのみを列記したのであるが、今回は主催者の意図なのか、あるいは自然にそうなったのかはわからないが、アビダルマ研究が多いのが眼につく。テーラヴァーダ仏教はヨーロッパで早くから成果が出ていたわけであるからアメリカの学者も取りつきやすいのであろうが、今回は説一切有部の研究が目立った。アビダルマ仏教の研究はアメリカの人々の心を引きつける何かがあるのであろうか。単純な疑問の一つである。

今の日本の仏教研究もそうであるが、アメリカの仏教研究は専門分野をしぼることを重んずる。これは大学院の制度とも、また大学への就職とも関連する。すなわち、大学に就職を保証されるためには少くとも一冊の本が出版されていることが必要であるが、そのためには大学院の時から専門をしぼって、それに向けて必死に論文を書いて、発表しなくてはならないわけである。普通の会社に就職していれば、四十才というのは安定したベテランというところであろうが、アメリカの大学制度では四十前後の人でも情容赦なく首にしてしまうことがある。だから懸命に論文を書いたり、今回のような学会に出席したりして実績を積み重ねるのである。今回の学会の参加者の多くもこれから一つの試練を経験する方々である。

それはともかく、研究だから分野を限定し、細密にやることは良いことではあるが、研究対象が宗教であるということは忘れてはいけないだろう。たしかに神を立てない宗教である仏教は、たとえ信じなくても研究することが容易である。これは仏教のありがたい所かもしれない。しかし、いずれの日にか仏教に対する自分の立場をはっきりしなくてはいけない時もくるのではないか。私の希望としては自分の立場をあらわにしつつも、しかも鋭く研究を進めてゆく人が出てほしいなと思うのである。たとえ仏教に対してポジティブであろ

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

うと、ネガティブであろうと、自分の立場をあらわにするところに、専門主義的研究ではなく、仏教全体を問うというか、仏教に関わる自己を問うという形で仏教的態度が現前してくるというか、いはば仏教に対する「学問」が成立するであろう。この学問の立場が、単なる自己陶酔と単なる客観的研究による業績主義を離れて、アメリカの社会に良いものをもたらすだろうと思う。

私は先に「アメリカ仏教学管見」(一九八六年)を書いた時と同様にアメリカの仏教研究の進展を確認したが、アメリカの友人が多くなるにつれて、つい研究レベルではなく本音のところでお互に仏教について語りたいという欲望が高まってくるのをおさえきれず、つい身の程知らずのことを書いてしまうのである。それにしても今回も自分の研究生活のあり方を深く反省し、身心ともに疲れはてた旅ではあった。

注

(1) ロバートの発表題目は、"The Chronology of Wŏnhyo's Life and Works: Some Preliminary Considerations" というものであった。

(2) "Buddhist Hermeneutics" (edited by Donald S. Lopez, Jr., Kuroda Institute, Studies in East Asian Buddhism 6, University of Hawaii Press, Honolulu, 1988) という最近の書物にロバートは "Ch'an Hermeneutics: A Korean View" (p. 231–p. 256) という論文を発表したが、その本の著者紹介 (p. 291) で、"The Apocryphal Vajrasamādhisūtra and the Origins of Ch'an" という本が間も無く出ると記される。

(3) "Sudden and Gradual: Approaches to Enlightenment in Chinese Thought" (edited by Peter N. Gregory; Kuroda Institute, Studies in East Asian Buddhism 5, University of Hawaii Press, Honolulu 1987) という本の中に、ロバートは "The "Short-cut" Approach of *K'an-hua* Meditation: The Evolution of a Practical Subitism in Chinese Ch'an Buddhism" という論文を寄せたが、その著者紹介 (p. 457) の中に、彼は最近博士論文に手を加え、出版しようとしているということに加えて、「He is also editor of, and contributor to, *Buddhist Apocryphal Scriptures.*」とあるによる。

(4) 鎌田茂雄『禅の語録9・禅源諸詮集都序』(筑摩書房、昭和四十六年) 二三二頁参照

(5) 注3所引の編著の中で、グレゴリー教授自身も "Sudden Enlightenment Followed by Gradual Cultivation: Tsung-mi's Analysis of Mind" (p. 279–p. 320) という論文を収めている。

(6) John R. McRae "The Northern School and the Formation of Early Ch'an Buddhism" (Kuroda Institute, Studies in East Asian Buddhism 3, University of Hawaii Press, Honolulu, 1986)

(7) "The Lotus Sūtra and Saichō's Interpretation of

NII-Electronic Library Service

Komazawa University

the Realization of Buddhahood with this Very Body (sokushin jōbutsu)," in George and Willa Tanabe (eds.), The Lotus Sūtra in Japanese Culture, Honolulu: University of Hawaii Press, forthcoming

（8）七月十二日（火）駒沢大学仏教経済研究所でこの学会の報告をしたが、その場では日本仏教の流れのチャートも示したので、ここに参考までに掲げてみよう。

日本仏教は中国仏教の宗も教も共に受け入れたが、どうもセクトとしての宗を正面にして、その内容としての教という図式で、つまり宗（教）というような形で出発し、その形は現在まで続いているといえよう。そして、鎌倉新仏教の一行専修、いわゆる選択主義はこの宗（教）のセクト主義を批判し、個々の行に徹したが、教団となるや、やはり宗（教）の図式になってしまった。一つの行のみということは純粋ではあるが、それを行じないものへの不寛容の態度、排除の意識があって、どうしても閉鎖的社会を形成し、その面から宗（教）の中に融合してしまいやすいのである。このグループ的閉鎖的な宗（教）に人人の仏業を重視する立場から再度プロテストすることが必要であろう。人人のというところには行の立場と共通性もあるが、不共なる個人の業が共なる社会に開かれ、人人が業を共有する形で生きてゆく。この場合の業とは勿論身口意の三業であるが、この三業を具体的にどのように仏業で埋めてゆくかというところに各人の個性の発揮があり、その理想は単に個人レベルに止まらず、共業の場としての社会と一線につらなるものでなければならない。その点では道元が『弁道話』の中で坐禅について「もし人一時なりといふとも、三業に仏印を標し、三昧に端坐するとき、遍法界みな仏印となり、尽虚空ことごとくさとりとなる。」という三業の把握の仕方は正しいが、私は今や三昧に端坐しない時の三業のあり方を論じないではすまされない現実だろうと思う。だからといって、この現今にあっても自分は道元と全く同じ立場なのだと言われる人を私は排除しようなどとは思わない。私は心からそのような人を尊敬したい。ただ私は道元ではなく、道元は私ではないのだという、ごくあたりまえの事実の確認は重要であろう。これをいつも念じていないと、私たちは増上慢と同じ程に有害な卑下慢という病にとりつかれてしまうのである。道元から解脱することが道元を理解し、道元と心おきなく対話する一つの道のように思われる。

NII-Electronic Library Service